



2004年度 外部評価と対応策

本学COEプログラムは静岡大学情報学部 八重樫純樹教授、国立歴史民俗博物館 常光徹助教授、立正大学文学部 黒田日出男教授を外部評価委員に委嘱し、2005年2月14日に2004年度外部評価を実施しました。当日はチェックシートに基づいて、具体的な問題点を指摘して頂き、後日各氏から下記のような評価報告書が届けられました。



委員の評価（要旨）

黒田 日出男 委員

2年目の活動は、ゆっくりとしたペースではあるが、おおむね着実かつ順調に研究計画が実行されている。3年目には研究計画の遂行をスピードアップし、全体的な飛躍を期待したい。

1. 『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳について

作業がスローペース過ぎる。

翻訳出版のターゲットが明確でない。誰のための翻訳か。

例えば次のような目的が考えられる。

A. 日本のきわめて独創的な学問伝統を紹介し、絵画資料を活用する研究スタイルを国際的に広げる。

B. 日本史や日本文化の研究に興味を持つ学生・研究者にビジュアルでユニークな、そして役立つ入門書として提供する。

C. 翻訳というよりも新たな本文を創り出すという展望を持った翻訳作業。

2. データベースと本作りの関係

先ず本作りをして、それを後からデータベース化するという順序では良いデータベースを作ることにならない。

分析作業室のパソコン及び関連機器が十分に活用されていない。またPD、RAの研究室にパソコンが見当たらなかったが、各人にノートパソコンを与え、日常的に利用できるようにすべきである。

第4班の活動が、第1班～第3班の活動と有機的に連携していない。第4班のメンバーが第1～3班の研究活動に加わって、活動や情報発信を発展すべきであろう。そのために、データベース構築をベースにした研究活動の発展に寄与できる編成に組み直すべきである。

このままでは、国際的な情報発信は書籍という形にとどまる。

3. 日本常民文化研究所の遺産

漁民史料のフルテキスト・データベース化など、もっと積極的に日本常民文化研究所の遺産をデータベース化して情報発信することを考えてほしい。

八重樫 純樹 委員

1. 課題名・組織化・活動全般

課題名の一般への浸透は薄い。

大学の取り組みは高く評価できるが、現在確保されているスペースでは不安である。

第4班の整合性に問題がある。第4班が第1～第3班に常に接して活動する必要がある。

2. 研究事業について

外部研究者の協力体制については、COE終了後も日本の非文字資料研究の拠点として活動することを視野に入れて支援体制を模索する必要がある。

データベースの構築と情報発信についての2004年度の活動は残念ながら評価に値しない。第4班が第1班～第3班から遊離して活動してきたように見える。本プログラムの体系的な情報の枠組み設定がされておらず、1～3班の成果との関係が明確でない。また情報の抽出・整理・記述作業には専門家の確保が不可欠であり、そのための人員確保と予算措置をすべきである。

世界的な情報化・情報発信の動向に注意し、配慮する必要がある。

1～3班については今後各班の間の連携が必要である。4班については情報化と情報発信について取り組み、その方向を明確にする必要がある。

常光 徹 委員

1. 総括評価

前年度に指摘した問題点は着実に改善されつつある。施設の充実、COE教員・共同研究員の採用による組織強化の努力は高く評価できる。

データベース構築については、組織体制を早急に強化する必要がある。

2. 各班の活動

1班の一部課題修正は、今後も常に進捗状況に応じて検討し、早い段階で行うべきであろう。

2班・3班については新たな領域であり、有効な方法論の模索段階であるとはいえ、次年度の早い段階には見通しをつけるべきであろう。

3. 共同研究について

外部の専門研究者を交えて共同研究を行う方式は高く評価できるが、効果的に機能しているとはいえない。

研究推進会議検討結果

研究推進会議は各氏からの評価報告を受け、現状の問題点を整理・検討の結果、以下のような対応策（2005年度に実行している内容）を決定した。

1. データベース化と情報発信について

各委員から厳しい意見が出された。データベース構築の見通しが無いということ、情報発信の全体構想が明確でないこと、またデータベース構築のための人員・予算の確保がなされていないこと等が指摘された。

これらの点については、強く反省しなければならない。3年目を迎えた2005年度には、データベース構築のために専門的なキャリアを持った職員1名を増員し、研究成果をデータベース化する過程を支援することにした。また、情報発信・データベース構築については、4班を中心にしながらも、1～3班の成果を各班でも独自に作成し公開することも考え、2005年度には一部文字データベースについては公開する予定である。



外部評価

2. 第4班の役割と活動について

各委員から、情報発信を担う第4班の活動が不十分であり、データベースの構築についても十分に検討を進めていないことが指摘された。この点については、第4班の自覚を促し、工夫するように指示をしている。4班では、データベース構築のための検討作業を、事業推進担当者・共同研究員の属する研究室の支援を受けて進めている。また広くデータベース、特に歴史情報のデータベースについて様々な試行をしている他研究機関とも提携するように取り組んでいる。

3. 事業間の連携

各委員から、第4班と他の1～3班との間の連携がほとんどなく、そのため十分な成果が見られないと指摘された。この点については、2005年度を通して活動内容を点検し、地域情報発信・実験展示及び理論研究の三つを課題とする新たな活動組織を編成し、発足させることにした。従来の第4班の成員がそれらで中心的な役割を担うことになるが、それに加えて1～3班の成員も加わり、画像・身体技法・環境の三つの統合した研究活動を展開し、4年度・5年度に情報発信を実現する。

4. マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編さんについて

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さんは、日本語版の翻訳であるが、その目標は単に日本研究者にあるものではなく、画像資料から絵引きを作るというユニークな画像活用方法を世界の共有財産にするために行うものであるが、その点についての可能な方法あるいは工夫すべき点の検討をさらに進めるように第1班に指示する。

5. 総括

以上のように、2年度目になる今回の外部評価では、3人の委員から多くの厳しい指摘があった。それらの問題点はいずれも本プログラムの弱点と内部においてもある程度認識してきた点であり、指摘を真摯に受け止め、改善の努力をしている。

人文系研究者中心の本プログラムでは、データベース構築に関しては必ずしも十分な経験や素養がなく、その点で素人的な段階から始めていたことは間違いないが、工学研究科の本プログラム参加者と人文系研究者の連携もようやく軌道に乗り、2005年度には種々の試みも進められている。

さらに弱点・欠点を克服するために、組織全体の点検を行い、大幅な組織再編成を行うことを計画している。課題別に組織を編成し、予算配分もデータベース化と情報発信に重点を置いた配分をする。また、重点的な課題を地域情報発信、実験展示そして総括理論研究の三つとして設定し、新たな組織で情報発信にむけて活動を行う。

なお、PD、RAへパソコンを支給すべきこと、および分析作業室の活用が不十分であると指摘されたが、初年度からPD・RAには各1台のノートパソコンが貸与され研究および業務において十分活用され、また分析作業室のコンピュータも有効に利用されデータも豊富に蓄積されていると判断している。